

「今後の県立高校に関する地域検討会議（第1回）」記録要旨【盛岡ブロック②】

平成27年6月8日（月）

盛岡市勤労福祉会館 4階401・402会議室

【佐藤 盛岡市副市長】

- ・推計によると、今のままの学級数の維持は難しいと思うが、あまり極端な学級減はしないほうがいいと考えている。
- ・盛岡市から市外へ通学している生徒もいるため、条件によって通学等への支援というのは必要だと思う。
- ・経営者との懇談会では企業とのミスマッチで辞める生徒も多いと言われているため、地域に有能な人材が残るという観点から、キャリア教育の充実についても配慮いただきたい。
- ・農業、工業、商業高校については、業界から即戦力としての人材が減ってきたとの声もあり、地域に良い人材を残すという意味も含め、あまり大きく変えるのはどうかと考えている。

【鈴木 葛巻町長】

- ・高校の存続に関しては町として最重要課題と認識しながら長い間、積極的に高校に関わってきた。
- ・今年度から学区制に対する県教委の柔軟な対応や県外からの山村留学も認めていただき、昨年よりも10名入学者が増えた。
- ・ほとんどの中学校卒業生が高校に進学する状況にあるので、どこにいても、誰でも進学できる環境を県としても確保していくべきであると思う。通学距離、通学時間についてしっかり考慮しながら対応していただきたい。
- ・学校と病院がなくなると過疎化に拍車がかかる。それぞれの自治体の取組み、産業、特性も考慮しながら学校配置を検討していただきたい。特に葛巻町は東北一の酪農の町、林業を基幹産業とする町であることを踏まえ、地域との連携をしっかりと重視しながら、魅力ある学校づくり、学科の存続をしていただきたい。
- ・時代に合った人材を育成するということが大事であり、今、風力・太陽光など再生可能エネルギーに取り組む現場の作業員が不足しているので、このような人材の養成もできれば考えてほしい。

【瀧澤 岩手町副町長】

- ・町づくりを考える中では、高校存続というのは最重要課題だと考えている。中高一貫教育や部活動（ホッケー等）で高校の特長づくりをしていくことが教育では大切ではないか。
- ・行政側では町内に新たな就職をした時の助成等を行っているが、なかなか人口減への歯止めとして結びついていない現状である。したがって、行政や地域住民に対し、高校は街づくりには欠かせないという意識づくりを進めていく必要がある。
- ・現在、福祉・介護等では人材不足であるので、そのような技術を身につける特長がある学科も必要ではないか。

【山本 矢巾町総務課長】

- ・学校、学科の再編では、今まで培ってきた学校の伝統、特色を失うことなく適正な学校規模を維持しながら教育内容の充実に努めていただきたい。
- ・学校生活に馴染めなくて不登校になった生徒に対する指導では、福祉、医療等の関係機関との連携を密にした支援体制を構築する必要があると考えている。

（次頁に続く）

- ・県の予算で教育した人材が県外へ流出しているという現状があるので、生まれ育った町が好きといった故郷愛を育む教育を高校在学中に取り入れ、地元回帰の心と郷土愛を育てる教育をお願いしたい。

【田村 盛岡市農業委員会委員】

- ・少子化については、岩手県中、盛岡市でもどこでも同じことが言われている。地域の人たち、子ども達になんとか早く結婚してたくさん子ども達が生まれるような指導を本当はしていかなければならないと考えている。

【杉本 葛巻町森林組合】

- ・少子化という問題は避けられないと思っている。しかし、実際に地元で高校がなくなってしまうのは怖いというのが率直な意見である。
- ・あるデータで親の年収と子どもの教育が比例するというのがあったが、経済的に厳しくても、子どもには充実した教育を受けさせたいと思っている。
- ・子どもには近くの高校に行きたくて欲しい、親の目の届く範囲でいろいろ支えてあげたい。もし、葛巻から盛岡の学校に通うとなると、下宿代で5～6万円、部活動でさらにお金がかかり、共稼ぎの給料でも経済的に厳しい。
- ・葛巻高校は小規模だが、葛巻町は酪農、林業、再生可能エネルギーの町として特長があるので、都市部から過疎地域へ生徒を呼ぶという方法もあると思う。

【松本 日専連盛岡理事長】

- ・盛岡市全体の発展には、街の賑わいが重要であり、そのためには「自分の故郷が大好き、自分の育った町が大好き」というような人材が育ってほしい。
- ・工業高校や商業高校を卒業した、即戦力の技術がある人材がほしいというような直接的なことをあまり思っているわけではない。一旦、岩手を離れて大学に進学してもいいので、将来、花開いた時に地元岩手に貢献してくれる人材が育ってってくれる等、少し長大な計画で人を育てていくということが教育の本心ではないか。高校生活の中で地域の人たちの温かい心に触れ、岩手で自分たちが育ったということを誇りに思っている卒業していけるような人材が育つことが願いであり、そのための教育環境を作っていくことが必要ではないかと思っている。
- ・盛岡工業高校があれだけ市街地から離れたところにあるのは、高校生が地域の人との熱い心と触れ合うことができないため、人材育成の観点からみるとあまり良くないと思う。高校は徒歩、または、自転車で通学できる距離にあるのがいいと思う。
- ・少子化の問題では、学級減はある程度避けられないことだと思う。芸術、音楽、体育分野等の教員が高校生の心の成長に果たす役割は大きいので、学級減を行う場合は、その分野の教員の充実について考えていただきたい。
- ・高校生にとってクラブ活動の果たす役割は大きい。学校が小規模になるとクラブの選択肢が減る、あるいはクラブ活動を指導する教員が複数の部活動の顧問を兼任しなければならなくなり、目が届かなくなるのではないかという懸念がある。
- ・通学の問題について下宿の話も出たが寮を設置するという考え方はできないものか。通学できる範囲に高校がないという問題が起こってきた時は、今の時代に即した寮について考えていただきたい。

【吉澤 葛巻町商工会会長】

- ・高校が存続できなくなり、統合することになると、町全体が沈滞化していくのではないかと。

(次頁に続く)

- ・素晴らしい自然の中で、子ども達が頑張っている姿を見ると是非とも高校を存続させていただきたい。山村留学や小中学校共通の給食、特産である牛乳の高校生への提供等、町での支援体制を理解いただき、高校を存続して欲しい。

【八戸 岩手町商工会会長】

- ・地元の沼宮内高校の存続は重要課題としている。少子化の影響で中学校卒業生が減っていくという状況にあり、学級数は減っていくものと思っている。
- ・岩手町の生徒の約6割が盛岡市へ通学している状況である。少子化の傾向がある中で、このままでいくと沼宮内高校の生徒数がどうしても伸び悩むというのはやむを得ないと思うが、その辺にも配慮していただき存続していただけるとありがたい。
- ・特色ある学校づくりということで学科等、現状、ニーズに合った学科を併設していくというような対応も考えなければならないのではないかと。北海道の高校では特色ある学科で全国から生徒を集めているところもあるので、県外の状況も調べながら岩手県に生徒が集まってくるような対応もしていただきたい。
- ・岩手町は特にホッケーに力を入れている。県内に2校、ホッケー部があり、優秀な生徒が二分され厳しい状況である。全国大会では上位には食い込んでいるが、それ以上レベルをあげるためには今後考えていかなければいけない。

【沼田 矢巾町商工会事務局長】

- ・学校というのは地域の中核的存在であり、効率性の追求のあまり、軽々しく判断して縮小にばかり走らないようお願いをしたい。
- ・不来方高校の回りは30年もしないうちにすべて宅地化されている。これが逆に廃校や学校規模の縮小ということになると過疎化が進行するのではないかと、活力が奪われるのではないかと。そのような点から、仮に再編ということになった場合においては、慎重の上にも慎重を期してほしい。

【山本 葛巻町小中学校PTA連合会会長】

- ・教育に関しては特定の人だけが教育を受けられるというのではなく、どこでも誰でも平等の教育を受ける環境を作っていただきたい。
- ・自宅から通学でない場合、経済的費用もかかり、目が行き届かないということもあるため、地元で高校を存続していただきたい。
- ・小規模であっても2クラスは必要である。一つは就職クラス、もう一つは進学クラスの最低でも、2つのクラスで充実した教育を受けられる環境を作っていただきたい。

【川村 矢巾町PTA連絡協議会副会長】

- ・県教委の現状についての説明を聴いて、深刻な状況であることを認識した。それぞれ高校では特色のある学校運営をしているので生徒数、学級数の数にとらわれない形で検討をお願いしたい。
- ・県立高校とはいえ地域経済や地域の住民と密接した関係であるため、学校が設置されている市町村の地域住民との意見交換を積極的をお願いしたい。
- ・不来方高校は開校当時、田んぼの中の高校だったが、高校の発展が町の活性化につながるという部分もあることを考慮してほしい。

【千葉 盛岡市教育委員会教育長】

- ・このような機会に高校教育の在り方、高校教育の目的ということを確認する必要があると思っている。資料にあるとおり、高校は目的を持って入る学校であることをきちんと確認する必要があるのではないと思う。(次頁に続く)

- ・盛岡市では将来社会に出て、仕事に就き自分の力で生きていく力を小学校、中学校、市立高校教育の中で培っていくキャリア教育に取り組んでいる。高校はある意味、小・中学校教育の延長線上にあるわけなので、小中学校での教育をしっかりと行うことが高校教育の充実にもつながるのではないかと。キャリア教育の中では、望ましい職業観、勤労観を培いながら、子ども達に将来に対する夢や希望を持たせるということに取り組んでおり、更に充実させる必要がある。
- ・どうしても再編は止むなしとなった場合、通学等で経済的負担が増えるために教育を受ける機会が制限されること等のないように、経済面での支援に取り組んでいただきたい。

【中田 葛巻町教育委員会教育長】

- ・教育の機会の保障という観点からの小規模校への対応については慎重に検討していただきたい。葛巻高校は、地元の高校でも自分の希望、進路が実現できるような質の高い教育を保証している。平成 27 年度、葛巻町の教育振興協議会に町独自に 1,000 万円を超える予算を計上して支援をしている。高い大学合格率は先生方の学力向上の取組み、あるいは適切な進路指導はもちろんあるが、平成 25 年からスタートした予備校等の講師招聘や、盛岡の予備校の夏期講習参加等の町の取組みが実を結びつつある結果ではないかと思っている。
- ・100%の就職状況を継続して実現しており、地元の高校に入ってもしっかりと自分の進路、希望が実現できるような高い教育の質を維持するための努力を学校と地元の自治体が一体になって取り組んでいる。小規模校のモデルとしての葛巻高校は存続させなければいけないし、今後も行政として全面的にバックアップをしていきたいと思うので理解をお願いしたい。

【平澤 岩手町教育委員会教育長】

- ・基本的方向には「原則として 4～6 学級」とあり、4～6 学級の高校に入った生徒は枠内の生徒、そうでない地方の生徒は特例的な原則外の学校の生徒ということになる。この「原則として」「基本として」と入れていることの必要性を検討いただきたい。
- ・地元市町村との連携協力の中身とはなにか。このような地域検討会議で情報をもらいながら検討するのも連携協力のひとつだとは思いますが、小規模校では、県の財政事情を考え、地元市町村も県立とはいえ応分の負担を想定しているのか。

【越 矢巾町教育委員会教育長】

- ・矢巾町は町内に 1 校しか県立高校がないので小中学生から見て憧れる高校生であって欲しいと思っている。町内からの入学者はそれほど多くはないが、不来方高校の生徒を素晴らしい高校生だと小中学生は見ているし、町民も不来方高校を自分たちの高校だと思っていると思う。
- ・不来方高校では、体育学系の影響でたくさんの優秀な運動部があり、合唱部の活動は中学校へも良い影響を与えている。町の国際交流協会では、外国語学系の生徒のプレゼンを見て、その活動のすばらしさを中学生は感じている。このような不来方高校の活躍の源は学系の充実だろうと思うので、学系の更なる充実をお願いしたい。

【杉本 盛岡市中学校長会長】

- ・教育の原点は一人ひとりの個の人間形成、実現であるにとらえており、望ましい学校の規模を概ね 1 学年 4～6 学級とするという場合も、統計的な話をする場合も、一人ひとりの進路をどう保障していくかということを考慮してほしい。
- ・年々増えている発達障害を抱えている子ども達の高校教育の保障をどうするかという問題も考えなければならない。知的能力はあるにも関わらず、生活に適応できない子どもへ手厚く高校教育を

(次頁に続く)

受ける権利を保障していくことを拡大していただきたい。特別支援学校も含めた中高連携を今後とも進めていきたいと思う。

- ・学科の再編では、各高校で特色のある学科や、素晴らしい実績を残すような指導をしている高校が増えている。林業を教えているのは盛岡農業高校だけだと聞いたが、林業県の岩手県にとって林学について学習する場があることを進路指導の中で伝えなければならない。
- ・キャリア教育では産業界、商工会、経済界、中学校現場、教育委員会との連携が進んでいる。今までサービス業、流通産業が主だったが、安全性の問題もあるものの、1、2次産業の中学生の体験というのは今後ますます大事になってくると思うので御理解、御協力をお願いしたい。
- ・中学1年生の成績が調査書に入るとのことだが、中1ギャップでのつまずきをクリアして2、3年生で頑張っている生徒もたくさんいるので、1年生のつまずきが高校入試において不利な材料になることのないよう御配慮いただきたい。
- ・盛岡市外の高校に通学している生徒もいるので、教育の機会均等の保障ということで通学に対する支援について御配慮いただければと思う。

【 県教委 】

- ・望ましい学校規模については、生徒の進路実現や多様な経験を積むという意味で1学年4～6学級程度を基本としているが、小規模校が増加していることや、それぞれ学校の実践活動も踏まえて、学校規模に幅を持たせる意味で、「原則」という言葉を加えている。小規模校においては地理的条件や教育の機会の保障等の観点を考慮し慎重に検討する。
- ・小規模校においては生徒一人ひとりに対応した、きめ細やかな指導が出来る、様々なメリットがある。地域との連携によって進路や部活動で実績を上げたり、国際交流活動等の取組みもされている。一方で、教員配置人数が限られることから、進学から就職までの多様な進路希望への対応が難しい面もある。4学級以上でなければセンター試験に対応した教科を設定することは難しい現状にもある。部活動では団体競技種目の設定が制限されるということもある。このような課題を、より少なくしていくという方策を様々な観点から議論して、課題の解消に連携して取り組んでいきたいと考えている。葛巻町のように高校へ積極的に支援していただいているところもあるが、これは県が市町村に対し、強制的に財政的な支援を求めるものではない。お互いが連携し、どのように知恵を出し合っていってよいかを、今後考えて行かなければならない。
- ・通学に対する支援については、統合に伴い経済的な理由で就学が出来ないということがないよう、具体的な激変緩和策として、現在も県は通学バスに対する補助をしているが、他県の事例も参考にしながら本県としての望ましい通学支援策を今年度、検討を行っていきたい。しかし、具体の支援策については地域によって通学事情が異なることや予算等のこともあるので、意見を聞きながら検討していく必要があると考えている。

【鈴木 葛巻町長】

- ・町として小中学校については、等しく教育の機会を与えることが社会の役割と考え、小規模校も維持をしているが、どこまでも維持するものではなく、地元が統廃合を望んだらすぐにでも対応できるようにしている。行政側からは情報の提供はするが、強制的に統廃合はしないということを基本にしている。
- ・UターンやIターンを勧める情報発信をして、成果が徐々に現れてきているが、都市からの移住の条件として小中学校は重視され、また、高校がない町では来る人が限定される。

(次頁に続く)

- ・中高一貫教育に長い間取り組んできたが、それが果たしてきた役割は大きい。高い進学率や欠席者が少ないことに加え、10年以上も進学・就職100%を達成している。これには現場の教員の努力があるので、検討する場合には、現場の教員の声も重視してほしい。

【松本 日専連盛岡理事長】

- ・商業の現場で働く従業員は高学歴とはいいがたい人が多いが、高学歴でなくても素晴らしい仕事をしている人がいる。教育の機会の均等は重要であるが、どうしても教育を受けることが出来なかったということは起こってくると思うので、職人や下働きをしている店員が仕事に対し誇りを持てるような社会を作っていかなければならない。